

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成30年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻7月号(通巻588号)

風土



佐倉にて・他

神蔵器

ラムネ呑む十一万石の城下

木斛に兵の落書夏兆す

雀来て孟宗竹の皮を脱ぐ

本丸の地べたを消して揚羽翔つ

武家屋敷胡瓜・トマトと花競ふ

昭和十八年・佐倉聯隊は波郷の入隊せし聯隊

まぼろしの夏日軍靴の音ひびく

悼 小倉惠都子

万緑の真つ只中に涅槃かな

草に置く通夜への灯火梅は実

通夜の灯の幹のみ映す新樹かな

山吹の十重に二十重にみろくさま

菖蒲湯に八十一のあそびかな

泰山木天の磐戸のいまひらく



竹間集

同人作品



水平線

田中佐知子

一の舟入落花に間合ありにけり
散る花の池のむかうに阿弥陀仏
かぎ悼明史先生三句ろへる水平線や鳥帰る
虎杖を手折りし音のはるけさよ
虎杖を手折りしあとのしじまかな
清和なる未完の弥陀の鑿のあと
万緑や仏師に禅書文学書

若狭の子

南 うみを

はなびらを掃き寄せるとも散らすとも
塗り終へし畦にはなびらきりもなし
蓬生にかたむき沈むよもぎ籠
すり傷に蓬をあてて若狭の子
葱坊主うすき座布団すすめられ
薯の苗頭をもたげたる山の雨
蕨摘むひとつ見つけて十をつむ

桜餅

島谷 征良

雀らも声をしぼれり元政忌
水の音日永の園のいづかたも
桜餅 河津桜の色をもて
ものの芽の油ぎつたるごときあり
若鮎の放流のあと雨おそふ
われここにありと日陰のすみれ草
磯開鶉は悠々と羽抅げ

春の極み

大竹 淑子

橋立の松の声聞く臙かな
風は西に吹き変はりぬて苗木市
峽に雲白梅は色失へり
荒魂あしたまの社八坂、豊平在に詣でさくら散る
「幾松」は商ひ中よ散るさくら
ほとけの座みてより高瀬川速し
髪切りにゆくととき春の極まれり

ゆく春

斉藤 小夜

囀に茶室の障子そつと引く
やはらかき風の流して茶摘うた
踏切の砂利の間あひよりつづみ草
鶯の来鳴くひと日よ心浮く
春陰や冷たき頬を手にはさみ
髪の高少しへり来し春愁
ゆく春や旅の荷上げる棚高し

春水

徳丸 峻二

茶柱の立ちては倒る花疲れ
春水に手を入れ底に届くまで
春陰の理科室に見る人体図
犬の目の高さに子の目桜散る
犬の手を握り見てをり春の星
春暁の階段を猫上りぬて
茶摘女や背の赤子を揺すりつつ

鳥曇

宮川 みね子

十一面観音菩薩燕来る
櫂の音水の先ゆく春深し
うすうすと大菩薩峠鳥曇
春陰の膝組みかへて検査待つ
鳥ぐもり検査採血管四本
根分して一日家にこもりけり
春陰の泉は音もなく湧けり

郷

— 関根 洋子 —

堅香子の花やひみつの国の宴
かぎろひの丘翁ともおうなとも
犬の影先に発たせて春の月
誰彼にかろき挨拶彼岸道
鷹鳩と化すや線香手向け合ひ
山桜地卵の殻ざらざらす
花種を日向に出してなんでも屋
一握の昼のお菜のつくしんぼ
水遁の術をおぼえし蛙の子
アメーバの如き杉菜と格闘す

奔放にさざ波走る代田かな
鳥影の素つ飛んでゆく青嵐
柏餅大きく作り農婦老ゆ
笹舟の水乗り換ふる芒種かな
植ゑし田の蛇行落ちつき来りけり
山家かな身ほとりにある蠅叩
夏薊ゴム長靴が常となり
まだ少し水の見えゐる青田かな
つくばひを満たして上がる沙羅の雨
羽抜鶏わたくし雨を馳せ抜ける

山河集

同人作品



神蔵
器選

春耕の鋤置けば来る小鳥どち
菜の花や手を挙げて来る蛙づたひ
小流れに虫柱なす四月尽
山桜散る廃屋の粗むしろ
花散るや風の集まる峽の口

生田 作

草を焼く炎ほとけの灯となれり
蘆の芽の育ちて雁の声とどく
春の雁鉄片となり帰りゆく
夕桜母をほとけとまだ呼べず
花曇りひと時西行の仮名に会ふ

岡田 真澄

さくら貝恋といくさと波の傷
善光寺四門四額や松の芯
鐘打つや天上わたる花吹雪

小林 和子

咲き満ちて花の銜を浴びにけり
なまぬるき夜の雨となり蛙なく

柿沼 罌子

ログハウスの外に時計や木の芽風
春雨や鵲 鶴 走る 石 畳
陽炎やポイント並ぶ車両基地
蜂の来て静かな午後の始まりぬ
日月の菩薩とともに春深む

上野

亀鳴くを聴きに行くなり青柳寺
宮内庁楽部に参づ花の雨
行く春の火焰太鼓の竜・鳳凰
家苞のわらびは木喰生家より
「時間壺」の中の月日や春逝けり

林 いづみ

風土独語／神蔵器



くるぶしのひかり出したる御身拭

浅田 光代

一年の埃や塵、穢れを拭い浄められて、釈尊はもともとの輝きを取り戻し、前にも増したひかりを放たれた。その光こそ釈尊のあふれる慈悲、衆生済度の御心であり、仰ぎ見る作者にとつても有難い光、以心伝心、摩訶迦葉の微笑であったであろう。

なお、人間の踝は無用の長物のように思われ勝ちであるが、実は人体の体重を支え、安定させる非常に重要な働きをしているところで、この句では釈尊その人を象徴している。例えば、若狭の羽賀寺の国宝十一面観音菩薩像の右手がとくに長いこと、また、レオナルド・ダ・ビンチの「受胎告知」の聖マリアの右手が意識的に長く画かれている。どちらも右手を長くしているのは慈悲、慈愛の深さの象徴である。内容は違うが踝を象徴的に使った句に

針供養女の齢くるぶしに

桂 郎

子規庵の鶏頭の種時きにけり 須藤美智子

鶏頭の十四五本もありぬべし

子 規

の句について「風景も作品として捕へられた以上、ただの風景ではない。――中略――言ひかへれば、「十四五本もありぬべし」といふ在りやうは、鶏頭のもの自體なのだ。そこには鶏頭の法則が顕現されてあると言つてもよい。だからこの作品のレアリティを支えるものは、外界ではなく、外界に触れて発する作者の側の発見の驚異であり、ものの根源まで見透す作者の心眼であり、思想である」（山本健吉「現代俳句」）

私達も多かれ少なかれ縁あつて子規につながり俳句を志している。子規庵の鶏頭の種子を蒔くことは、子規の志を受け継ぐことで、鶏頭を在らしめる時間と空間、その根源にある子規の生と己の生が深慮に触れ合い、たしかな感動があつたのだ。

瓜売りとナヒブ砂漠を越えにけり 島 玲子

島玲子さんは、百八日間で、南半球一周の船旅から、四月末に帰国された。この句は、アフリカ南部のナミビア国、ウオルウイスベイに寄港、オプシヨナルツァー、バスでナビル砂漠を越えた時の作品である。

この句は単なる観光俳句ではない。南極の手つかずの大自然の素晴らしさ、世界遺産のような旧蹟も名所もない。有るものは貧困に苦しむ多くの民と赤茶けた砂の砂漠ばかりのナミビア。日本のパイスケのような籠に瓜を盛り上げて吊るし天秤で担ぎ、黙々と砂漠を越えて行く。

(以下略)

風土集



神蔵器選

五月来る樹と樹のどこか触れ合つて 高槻

浅田 光代

みるぶしのひかり出したる御身拭
み仏のもどりて夜の白牡丹
たんぽぽの絮を吹きつつ大原野
耳たぶにリングのくぼみ春の暮
ひんがしへ潮の流るる仏生会 伊東

稲葉ちよこ

百済仏のいづれ童顔木の芽雨
言訳のことばつぎはぎ山笑ふ
四月来る十八歳の定期券
本降りになるまで四月の鋏を打つ
子規庵の鶏頭の種蒔きにけり さいたま

須藤美智子

若葉して櫛広場にコンサート
風光る音楽隊はポリスマン
春陰や通船堀の史跡道
花どきの柿生鶴川過ぎゆけり

岩燕垂れし鉄鎖を過ぎりけり 相模原

天野みゆき

奉納の三尺草鮭榛の花
法然忌駒下駄滑る石畳
白椿わが正面を切りて落つ
一輪草竜馬の妻の其の後かな
国境の橋渡りけりカンナ燃ゆ 阿南

島 玲子

折り紙の雛飾りも船の旅
瓜売りとナビブ砂漠を越えにけり
煩惱の数の旅路やあたたかし
逃げ水を車窓にナミブ砂漠ゆく
屋根替の茅積み代官屋敷かな 川崎

内藤 静

穴太積の石に刻印山桜
幹巖となりて神代桜咲く
澎湃とからまつ芽吹く信濃かな
芽柳や一国一城橋一つ